

---

# 新世紀エヴァンゲリオン ～人格交換？～

藤之宮 アレス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン ～人格交換？～

### 【Nコード】

N2679Q

### 【作者名】

藤之宮 アレス

### 【あらすじ】

いつも通りにシンクロ率テストを終えて帰ろうとするシンジ。だが、今日はミサトのおごりで高級料理店に行くこととなった。急いで待ち合わせ場所に向かうシンジは途中のエレベーターで誰かと衝突してしまい…大変な事が起きてしまった…！

## 第1話（前書き）

元ネタはとあるアンソロジーにあったシンジとアスカの身体が入れ替わる…と言うネタです。

コレを見てピンッ！と来てこんなおバカな話を思いつきました。

一部のキャラの言動がおかしい時があります。

仕様ですので気にしないで下さいw

耐えられない方はブラウザバックして待避して下さい。

無問題の方はそのままお読み下さい。

## 第1話

時間は第9使徒マトリエル、第10使徒サンダルフォンの間位と  
思って下さい。

ただし、出ないハズのキャラが出る場合もあり得るので気にしな  
いで下さい。

基本はシンジ君視点で話は進みます。

「はい、今日のシンクロ率テスト終了よ。」

ネルフの科学部長、赤木リツコさんがそう言った。綺麗な金髪でよ  
く似合っている。ややつり目で冷たい印象を与える。左目の下に泣  
きほくろがある。

いつも白衣しか着てないので病院に行けばリツコさんがいっぱい  
いると勘違いしたことがあったけ。

「毎日どうしてこんな事をしなくちゃいけないんだと愚痴を言っ  
てしょうがないか」

僕はブツブツ独り言を言いながらシャワーを浴びていた。

「あつ、そう言えばミサトさんが『今日はボーナスが出たからフラ  
ンス料理のフルコースを御馳走する』って言ってたな。

…たまにはいいか、今日のメニューを考えなくていいからね」

僕はシャワーを止めて更衣室に行き着替え始めた。

「アスカは大喜びしてたっけ…。綾波は…無表情だったな。フランク料理ってどんな料理なんだろう？ちよっと楽しみ」

僕はシャワールームから出て急いでエレベーターに向かって走った。ちよっと遅れちゃったな。アスカは怒ってるだろうな。『遅いわよ！バカシンジ！』って怒るだろうな。僕は少し微笑んだ。もう少しでエレベーターにたどり着こうとしたとき…。

「あっ！どいて！」

エレベーターから誰か出てきた。僕は避けきれずに頭同士でぶつかってしまった。一瞬星が見えて僕は倒れた。

どれくらいの時が流れたのだろうか？ぼんやりする意識の中、誰かが僕を呼ぶ。

「……力……。イ力……。碇君？」

僕はゆっくりと目を開けた。目の前にあったのはよく鏡で見ている僕の顔だった。

「はは、なんだ誰かと思ったら僕か。てっきりアスカが迎えに来たと思ったら僕がエレベーターから出て来るなんて…！？」

自分の前に自分がいるということをやうやく気付いた。

「な？な？な？なんで！？なんで僕が二人いる？ひよつとして僕は双子だったのか！？それとも、と、父さんの策略か！？」

「碇君、大丈夫？自分の着ている服をよく見たら？」

目の前にいる僕が僕に言う。

「…？これは、女子の制服。僕は女装の趣味があつたのか！？」

僕は焦りながら自分の胸を触った。弾む手応え。

「ひよつとして…！？」

僕はスカートの中に手を入れる。

「ない！アレがない！」

「何してるの…？」

目の前の僕は無表情で話しかけてくる。ってか、誰かに似てるな。僕は更に自分の手を見た。色白くて艶のある手。実に女の子らしい手と言った印象を受ける。ここまで艶やかな手をしてるのは…。僕は頭の中に一人の女の子の顔が浮かんた。

「ひよつとして綾波！僕はいつから綾波になつたんだあ！？」

僕は頭を抱えてそう叫んだ。

「何をトチ狂ってるの？見て分らないの？あなたと私は入れ替わつたのよ、人格が」

「えっ？入れ替わつた？人格…が？」

僕の頬に冷や汗が流れる。人格が入れ替わる…？そんな漫画みたいな事があり得るのだろうか？でも現に入れ替わってる。誰が何と言

おうと入れ替わってる。

「ここでもうしても仕方がない。早くミサトさんの所に行こう」  
僕たちはさっき来たエレベーターに乗り込んでミサトさんの所に行った。

エレベータが開くと目の前に女の子が仁王立ちで立っていた。茶色の髪が綺麗に輝いている。後ろにつけた赤いリボンが彼女の性格を表していた。炎の様に熱い性格を…。

「おっそいわよ！何やってたのよあんたは！」

廊下に声が響きわたった。僕の耳はキーンと言う音でうるさかった。いきなり怒鳴ってきた女の子はセカンドCHILDレンの『惣流』アスカ『ラングレー』。

僕と同じ14歳、何でもドイツ人のクォーター…らしい。

「全く、遅いわよ！あたしは待ちくたびれてお婆さんになるかと思っただけだから！」

「それはちよつと、いきすぎた表現じゃない？」

後ろの方で僕の保護者兼上司の葛城ミサトさん（2X） 紙面に一部乱れが出ています がコーヒーをすすっていた。漆黒の黒髪が似合っている。

ナイスバディでバストは自称Eカップとのこと。だけど真相は誰も知らない。

「良いじゃない！そんな細かいことは！とにかく…！遅いのよあんたは！」

アスカは僕になった綾波に向かって怒鳴り続けていた。

「…碇君ならそっちょ。」

綾波は無表情で僕の方を指さした。

「はあ？何を訳の分からないことを言ってるのよ！どこからどう見ても碇シンジはあんたじゃない！」

「ちょっと待ってよアスカ！綾波の言うとおり僕はこっちで綾波はそっちなんだよ！」

「…。あんた達ねえ、このあたしをおちよくってるの！？それにしてもあんた達、お互いのものまねが上手いわねえ？」

アスカが不思議そうな顔をして僕と綾波を見ていた。

「だからあ、そっちは外見上は碇シンジだけど中身は綾波でこっちの方が外見は綾波だけど中身は碇シンジなんだよ」

僕は少し微笑みながらそう言った。

「あんたバカア？冗談はそれぐらいにしてよ。人格が交換だなんで…」

「ちょーっと待った！今、レイが微笑んだでしょう！？」

ミサトさんが驚きの声を上げた。

「え？た、確かにファーストが笑った。と言うことは本当に人格が入れ替わったの…？」

アスカがひきつった顔で僕らを見ていた。

「どうやら事は重大かも知れないわね。っと、今はこんな事で言い争っている場合じゃないわ。このフランス料理屋は今日までのの。開店記念日で半額なのは…」

ミサトさんが立ち上がった。なんだ、安いからおごってくれたのか…。

「…ミサトってケチね…」

アスカがボソリと言った。

「ん！？アスカ、なんか言った!？」

ミサトさんが振り向いてアスカの方を見た。

「いいえ。何も言つてませんわよ」

アスカはそっぽを向いてそう言った。

ミサトさんの車に着くと一人の女性が立っていた。あの人は…。

「何やってたの？遅いじゃない」

リツコさんだ。一体何故こんなところに…？

「ちょっとね…。そうそう聞いてよ、シンジ君とレイが……。」

ミサトさんは僕と綾波の状態を説明した。リツコさんは顎に手をやりながら考えていた。

「なるほど、面白い話じゃない。けど、今はこの事で話してる時間はないわね」

リツコさんは腕時計を見た。

「…あんだ、あたしが誘った時は仕事があるって断ったくせに今頃になってどつという風の吹き回し？」

「気が変わったのよ。たまにはミサトのおごりでフランス料理も悪くないかなって…」

「ちょっと待つてよ！何であたしがあんだの分までおごらなくちゃならないのよ！」

「ふうん、そう言うことを言うんだ。ねえねえ、あなた達、ミサトと加持の過去の面白い話を聞きたくない？」

「わ、分かったわよ！おごりますよ！ったく…」

「最初から素直にそう言えば良いじゃない」

ミサトさんはふくれっ面で怒っていた。

「それじゃあ、仕事は…？」

「マヤに丸投げしてきたわ。」

「むごいわね……」

何だかんだと言いながら僕たちはミサトさんの車に乗り込んだ。  
さすがに五人はきつかった……。

「それはそうとリツコ、あんた服は持ってるの？」

「ミサト、貸して頂戴」

「はいはい……」

そして自宅のマンションに戻って着替えることにした。

さてと、僕は良いんだ。ちゃんと正装はあるから……。問題は僕の着る服だ。

綾波は私服なんて持ってるのかなあ？

「ねえ綾波、服持ってるの？」

「持っていないわ。」

「……」

やはりというか予想通り持ってなかった。仕方がない、アスカに聞いてみよう……。

「ねえアスカ、僕に合う服貸して」

「え〜？まあ良いわよ」

アスカはイヤそうな顔をしつつ、紺色のドレスらしい服を僕に渡してくれた。早速僕は着てみた。

「どう？ぴつたり？」

「…胸がゆるい」

「ふっふ〜ん。そりゃあ、ファーストよりあたしの胸の方が大きいに決まってるじゃない」

「けど、お腹まわりもゆるい」

「…！腰回りが緩いですって！？シンジ〜！」

アスカの目が光った。まずい！怒らせちゃった！

「ファーストの方がウエストが細いって言うの！？あたしは認めないわよ！」

「そんなこと言っただって…」

「シンジのくせに生意気よ！」

アスカはプンプンと言った表現が似合う位怒っていた。

これ以上、何かを言ったらどんな事言われるか分からないから僕は黙るしかなかった。

フランス料理店では何事も無く食事は終わった。

それにしても、綾波って小食なのかな？  
少し食べたらずぐにお腹が一杯になっちゃったよ。

とりあえず、ミサトさんのマンションに到着。  
今日はリツコさんと綾波も泊まる事になった。

綾波が使ってる身体は僕のだし、僕が使ってる身体は綾波のだし。  
そしてリツコさんは僕と綾波の状況を確認するためだ。

「それじゃあ、原因を話して頂戴。」

僕はリツコさんに人格が入れ替わった状況を説明した。

「なるほどね…」

リツコさんは顎に手を当てて考えていた。

「全く、バカシンジにしてもファーストにしてもドジよね」

「まあまあ…」

アス力をなだめるミサトさん。手にはもちろん缶ビールが握られていた。

「どうやら、頭を打った時の衝撃と角度が絶妙だった為に人格が交換されたみたいね」

「と言う事は…？」

「全く同じ角度と衝撃で元に戻る…と思うわ」

その言葉を聞いて、アス力が妙な微笑みを見せてきた。

「なるほどねえ。なら、あたしが補佐してあげるわ」

そう言っ僕と綾波の服を掴んで来た。

「ちょっと、待つてよアスカ！」

「ほら、遠慮しないの。おもいつきりぶつけてあげるから」

明らかに嬉しそうにしている。どう見てもストレス発散にしか見えない。

「待ちなさい、アスカ。全く同じ衝撃で同じ角度でないといけないのよ。もし、打ち所が悪ければ二人とも頭がパッパラパーになるわ」

「良いじゃない。二人がいなくてもあたしと式号機で使徒を倒して見せるわ」

「それだけじゃないわ。食事はどうするの？」

「へ？」

「貴女とミサトの食事を作ってるのは誰かしら？もし、シンジ君の頭がパーになったら当然、病院生活。その間、アスカとミサトは二人で生活しなくちゃいけないわね」

リツコさんの口元がつり上がっていた。実に悪魔チックな微笑みだ。

「ぐ……」

「まあ、ミサトの家事レベルは最低以下で改善しようも無いし。そうなったらアスカ、貴女が料理して家事をしないとイケないのよ？」

「ぐぐ……」

歯ぎしりして悔しそうにしているアスカ。確かにアスカもミサトさんと似たりよつたりで料理、家事はほとんど出来ない。

「まあ、そう言う訳で。一応、人格を入れ替える機械を作製してみるけど…。いつ出来るか分からないわ」

「分かりました」

「と言う訳でレイ。貴方も当面はこちらで生活なさい。着替えはシンジ君のを借りて。」

「はい」

と言う具合に話は進んで今日の所はリツコさんと綾波は泊まりとなったのだった。

## 第1話（後書き）

ついに書いてしまった…。

そもそもこのネタを思いついたのはエヴァが終わって2年位経った頃の話。

長い間放っておいてこのたび書いてみようかと思った次第。

ぶっちゃけ言うともまだ才チを考えて無いと言うwww

基本、シリアスに見えるかもしれませんが基本はギャグなので笑って貰えたら幸いです。

まあ、今回はプロローグ的なお話だったのでギャグ成分はあまり含まれておりません。

次回からは笑える…ハズ？

暖かい目で見守って下さいませ。

## 第2話（前書き）

とりあえず、2話目。

何処まで続くのか、作者にも分からないwww

とりあえず、今日もドタバタ

## 第2話

目覚ましが鳴り響いた。

僕は眠たい目をこすりながら起きた。

着替えようとした時に身体は綾波のモノだと思い出した。

「ごめん、綾波…」

そうつぶやきつつ僕は制服に着替えた。

ちなみに綾波から承諾は得ているので問題は無い。

そして、トイレに入っただのは良いけど顔が凄く熱くなったのは言うまでも無かった。

朝食と弁当を作っていると綾波が起きて来た。

実際には僕の身体だから僕が起きて来たみたいんだけど。

「おはよう、綾波」

「おはよう…」

そう言っただけ綾波はシャワー室に向かった。  
多分、顔を洗いに行ったのだろう。

「おはよう、レイ…じゃなくてシンジ君ね。」

「おはようございます、リツコさん」

続いて起きてきたのはリツコさんだった。

アスカとミサトさんは朝は遅いのは分かっているので放っておく。

「悪いけど、ブラックコーヒーを貰えるかしら？」

「分かりました」

僕は手早くカップにコーヒーを入れてポットからお湯を注ぐ。そしてそれをリツコさんの前に置く。

「ありがとう」

そう言っリツコさんはコーヒーをすする。

「…」

「…？」

「美味しいわね。やっぱりミサトには勿体ないわ…」

「…ありがとうございます…。」

「これならいつでもお嫁さんにいけるわよ。身体も女の子だしね」

「か、からかわないで下さい！」

僕はそう言っキッチンに戻っ料理を再開した。

「碇君」

僕の後ろに現れたのは綾波だった。

「どうしたの？」

「ちょっと…来てもらいたい」

そう言っつ綾波は僕の手を握ってキッチンから連れ出す。

廊下を歩いて…たどり着いたのはトイレの前だった。

「…え？」

「教えて欲しい」

そう言う事か。確かに男と女では違うんだよな。

「あゝ、その、何と言つか…」

コレは口で説明は…。『ズボンのチャックを開けてアレを出せば良いんだよ』で済むけど。

女の子の綾波では分からないだろうな。

「碇君？」

「わ、分かったよ…それなら一緒に…」

僕達と一緒にトイレの中に入った。

…疲れた。  
それもあり。

綾波は小声だったけど『コレが碇君の…』とか呟いていたが聞いてなかった事にする。

そして、困った事態が起きてしまった。

『熱膨張？』

と綾波に問われた時には何と答えたら良かったのか。

確かに、熱膨張に近い現象が起きたが、ちょっと違うんだよね…。  
とりあえず、『うん、そんなもんかな。放っておいても大丈夫だよ』  
と言って何とか難を逃れた。

今度、綾波に性教育の本を渡しておくべきだろうか真剣に考えてしまったのはご愛敬と言う事で。

リビングに戻ってみればミサトさんとアスカも起きていたようだ。  
ミサトさんは僕達の顔を見ると満面の笑みでこう言い放った。

「あら？朝からお楽しみだったのかしらかあ？」

「な、何を言ってるんですか、ミサトさん！」

「だって、リツコに聞いたなら二人でトイレに行ったって聞いたから」

まあ、確かに一緒にトイレに行ったのは間違いなのですが。

「そりゃ、綾波が分からないって…」

「それで？シンちゃんが手取り足取りで教えてあげたのね？」

「足は使ってませんが…」

「ふん！朝から何を不潔な事してるのかしらね！？」

顔を真っ赤にしているのはアスカだった。恥ずかしくて赤いのか怒って赤いのか分からないが。

「良いじゃないの。レイだって初めての体験なんだから。」

そう言ってミサトさんは綾波の方に身体を向けてからこう言い放った。

「それで、レイはシンちゃんを見てどうだったかしら？」

「な、何を聞いてるんですかミサトさん！！」

「まあ、あたしは前に拝ませてもらってるからねえ。レイとしてはどんな感想だったのかと…」

「碇君に触って貰ってたら大きくなった」

その言葉を聞いてリツコさんとアスカは盛大にコーヒーを吹き出していた。

「ほほお…それは実に貴重な体験だったわねえ」

駄目だ、エロ親父化してるよ、ミサトさん…。誰か止めて…。

「それでそれで？どんな感じだったかな？シンちゃんに触って貰って…」

「気持ち良モガ…」

僕は即座に綾波の口を手で覆った。

「朝から何をやってるのよ貴女は！」

そう言っリツコさんはハリセンでミサトさんの顔を思いっきり叩いていた。

盛大にスパーンと言う音が部屋に鳴り響いたのは言うまでも無かった。

僕たちは今は学校に向けて登校していた。

あの後ミサトさんはリツコさんに更に三発、ハリセンで叩かれて顔が赤くなっていた。

「全く、ミサトったら。場末の酒場に現れるエロ親父並みに下品になっってたわ…」

アスカはため息をついて歩いていた。

「うつ…」

僕も泣きそうな勢이었다。

「…」

綾波は相も変わらずだったが。

「おっはよー」

「おはようさん」

背後から来たのはケンスケとトウジだった。

二人は綾波（外見は僕）に挨拶する。

「おはよう…」

無感情で挨拶する綾波。

明らかに僕じゃないと分かるよな…。

「むー？何や、センスは綾波の物真似かいな？それにしても似てるなあ」

「似てる似てる」

二人はジロジロと綾波を見ていた。

「残念だね。そっちはファーストでこっちがあんた達の相手よ」  
そう言っアスカは僕の方を指さす。

「「は？」」

二人は呆然と僕の方を見る。

「朝から何を訳の分からん事を…。そっちは綾波やないか…」

「残念だけど、アスカの言う通りだよ。トウジ？」

そう僕が告げると二人は驚いた顔をして僕の顔を見た。

「…綾波に呼び捨てにされた…」

「と言うか、綾波が長く喋ってるのを初めて聞いた…」

二人して綾波にどんな人物像を描いているのか。

「碇君はそっち…」

綾波も僕の方を指さした。

「…」

じっと見つめて来るトウジとケンスケ。

「信じられないと思うけど、僕が碇シンジでそっちが綾波だよ？」

「…ちよいと信じられんが、ホンマにそっちがセンセみたいだな…」

「だな…。碇の喋る癖が所々に現れてる。」

以外と観察してるんだな、ケンスケ…。

「ほら、行かないと遅刻するわよ！」

アスカが大声で僕たちを呼ぶ。

アスカと綾波はいつの間にか先に歩いていたのだ。

「ま、待つてよ！」

僕達は走り始めた。

教室に着いた。

いつもより少し遅かった為、クラスはほとんど来ていた。

「おはよう」

僕はいつものように挨拶して中に入った。

「ざわっ！」

全員が驚いた顔をして僕の方を向いた。

「あの綾波が…」

「明るく挨拶して入って来ただ？」

「何が起きたのかしら…？」

全員がささやき合っていた…。

黙っていても仕方無いので僕は腹をくくってクラス全員に説明することにした。

説明中

「ほう／＼まるで漫画の様な話だな…」

「にしても、無表情の碇君も良いかも？」

色々と妙な事をささやかれてる様な気がしないでもないがあえて聞かなかった事にしておこう。

「でも、碇君？今日の4時限目は体育よ？」

「へ？」

委員長の洞木ヒカリさんの言葉を聞いて僕は呆然とした。  
確か、体育って…男子は校庭で球技で女子は水泳…だったよね？

「そうだ…今日も体育があつたんだ…」

「はい、コレ」

そう言つて水着を入れた袋を渡してくる綾波。

「ありがと、綾波…って、僕は何処で着替えれば？」

その質問をしたら教室の空気が凍った。

「それは…」

「…むむ…。身体はファーストだけど、中身はバカシンジだし…」

眉間にシワを寄せて考え込むアスカ。

「仕方無いのう。それならセンスはワシらと一緒に着替えたらええじゃん」

「おお！それは名案だ！」

妙に鼻息が荒くなったトウジとケンスケ。

明らかに女子の下着姿＆全裸を拝もうとしている気満々です。見ると他の男子も期待の眼差しで僕の方を見ていた。

「何バカな事言ってるのよ！！！！」

アスカはハイキックでケンスケのコメカミを蹴って吹っ飛ばす。ヒカリさんはトウジにラリアットを喰らわせて吹っ飛ばす。

「ぐはあ！！」

周りの男子は顔を青くしてガタガタ震えていた。

アスカとヒカリさんはハイタッチしてお互い笑顔で見つめ合っていた。

「……」

綾波は無表情でその光景を見ていた。

「と言う訳で。あんたは目隠しをしてあたし達と着替える。ファースト、あんたはシンジの手伝いね」

「分かったわ」

ってな具合に話は進んでいったのだ。

時間はあっという間に過ぎて。

僕はアスカと綾波に連れられて女子更衣室に入った。

女の子らしい香りが充満して何とも言えない気分になった。

「言っとくけど、その目隠しを外したら…」

「外したら？」

「私刑よ？まあ、元の身体に戻った時に…ね」

もの凄く冷たい声が耳元でささやかれた。

僕の背筋は一気に冷たくなってしまった。夏なのに涼しくなってしまう…。

今は当然目隠ししているため、全然見えない。

「はい、水着」

そう言って渡して来る。

僕は手探りで水着を着る。

うつ…こんな肌に密着するなんて…男だったら下だけなのに…。

「わあ…碇君の身体って綺麗だね…」

「ホント、下手な女子より綺麗な肌の色じゃない」

不意に聞こえた女子の声。

「ちょっと？何してるの？」

「バカシンジ？目隠し取ったらただじゃすまないわよ？」

「そ、そんな～…僕の身体で変なことしないでよ…」

「何もしてないわよ。ただ、パンツ一丁なだけよ」

「わ————っ！早く着替えてよ綾波い！」

水泳の時間。

僕は大変な事を忘れていた。

そう、泳げないのだ。

男子は基本的に水泳は無いから大丈夫だったけど…。

まさかこんな事になるなんて…。

（シンジが泳げないと言う設定はこの小説オリジナルです）

「ほら、バカシンジ。競争よ」

「ま、待つてよアスカ…僕は泳げないんだ…」

「え？」

啞然とした表情で僕を見るアスカ。

「へえ…そつか…泳げないんだ…」

段々と邪惡じみた笑みに変わってくるアスカ。凄く、イヤな予感を感じる…。

「それなら特訓ね！この時間で泳げる様にしてあげるわ！」

「え？」

「何を惚けた顔してるのよ。このあたしが、コーチになってあげるから感謝なさい！」

アスカはそう言うといきなり僕に抱き付いて来た。

「へ？あ、あれ？」

「それじゃ、いくわよー！」

そう言うアスカは僕をプールの中に放り込んだ。

「わー！何すんだよアスカ！」

「アスカじゃないわ！今はコーチと呼びなさい！」

「意味が分かんないよアスカ！」

こうして僕はアスカに散々しごかれるのであった…。



## 第2話（後書き）

さて、うらやましいのか悲しいのか分からない状況になった碇シンジ君。

だが、彼のドタバタ劇はまだまだ始まったばかりなのだ！

頼みの綱はリツコさんのみ！

そして、ゲンドウがこの事を知ったらどうするのか！？

さあ、次もシンジ君はうらやましい様な悲しい様な事に…なるのか？

### 第3話（前書き）

いやはや、若干放置気味でしたね

いや、忙しかったんですよ？

モンハンとかモンハンとかモンハンとかw

その他、よそ様の小説見たりとかw

と言う訳で3話目をどうぞ

### 第3話

その後は何事も無く授業は進み。  
そして下校。

今日もシンクロ率のテストを行う為にネルフにやってきたのは良いけど…。

「今日は中止？」

ミサトさんの口から出たのは今日は中止と言っ言葉。

「何よ、それなら電話の一つでもすれば良いじゃない！」

「いや、ゴミンゴミン、綺麗に忘れていたわ」

あっけらかんとして言うミサトさん。チャランポランなのは今に始まった話ではない。

「でも、いきなり中止なんですか？」

「そう。リッコつたら、プツンモードに入っちゃってね」

「プツンモード？」

「そ、プツン。面白い研究対象とか、手強い事が起きたら半ば暴走的に研究室に閉じこもってね」

ミサトさんは苦笑してコーヒーをすする。

「ひょっとして…」

「そう。あんた達を元に戻す機械を作製してるハズよ」

これで納得はいった。僕たちの為に頑張ってくれてるんだ…。

「分かりました。それなら今日は帰ります」

「ごめんね～。それと、今日は遅くなりそうだから3人で先に食べて良いわよ」

ミサトさんはそう言うのと部屋から出て行ってしまった。

「それじゃ、帰ろうか」

僕達は帰路についた。

帰る途中、僕と綾波はアスカと別れた。

綾波のマンションに行き、荷物を取りに行く為だ。当然ながら着替えがないと困る。

今だってアスカの下着を借りているのだから…。

困ったことにアスカのブラは…少し、大きいのだ。下のパンティも…ちよっぴり大きい。

あゝ、こんな体験はしたくなかったよ…。

僕はそう思いつつ綾波と一緒に荷造りしていたのだ。

ボストンバッグ2つ分の荷物を持って僕達は帰路につく。  
中身は予備の制服と下着のみ。何と、綾波は私服を持っていないのだ。

仕方がない、今度の日曜日に私服を買いに行くことにしよう。

マンションに帰るとアスカはソファで寝そべってテレビを見ていた。

テレビでは何やらアニメをやっている。

白い服で栗色の髪の女の子と金髪のツインテールで黒系統の服にマントを羽織って鎌で戦っていた。

『バンインド！？』

『コレが私の全力全壊！スターライトブレイカー！！！！』

栗色の髪の女の子が金髪の子に向けて桃色の砲撃を発射していた。

僕はそれを見て第五使徒の戦いを思い出して背中から冷や汗が流れていた…。

あの砲撃って…第五使徒と戦えるんじゃないの？

あの子がいたら僕と綾波もあんな目に遭わなかったかもなあ…。

「ふうん…魔法って便利よねえ…」

アスカはそう呟いて煎餅をかじっていた。

夢中そうなので僕達はとりあえず部屋に戻ろうとした。

「あ…」

考えてみたら、綾波の部屋はどうすれば良いんだろうか？

昨日はリツコさんとリビングで寝て貰ったけど、さすがに毎日だとなあ。

まあ、身体は僕のなんだけど、中身は女の子の綾波だし。

アスカの部屋は広いから二人位入りそうだけど…。

けど、僕も綾波も入れそうにない。

仕方が無い、駄目もとでアスカに聞いてみるか。

「アスカ、ちょっと良い？」

「あら、帰ってたの。それで、何の用？」

「綾波の事なんだけど、部屋をどうしようかなと思ったんだけど…」

「ファーストの？そんなの決まって…」

アスカの口が止まった。そうなのだ。部屋の空きは無いし、アスカは多分入れてはくれないだろう。

「コレはかなりの問題ね…。普段のあんた達なら妥協に妥協を重ねて五千万歩譲ってファーストと一緒にしても良いけど…」

アスカは僕達の方をジロジロ見てる。

「バカシンジは身体は良いんだけど、中身が大問題だし、ファーストは中身は良いけど外側が問題だし…」

腕組みしてウンウン唸ってる。

「やっぱりそうなるよね…」

「私は碇君の部屋で問題無いわ」

「そんなの良いわけ…。あ、別に問題無いか。お互いの身体だからわざわざキズ物にする訳無いだろうし」

そう言っアスカは手をポンツと叩いた。

確かに、コレは綾波の身体だから僕はそんな事するわけ無いし。

綾波だつて…と言うか、知識はあるのだろうか…？

「傷物？」

「いや、まあ、大人の事情だよ。それなら綾波は僕の部屋で良いよね？」

「構わない」

と言う具合に僕と綾波は一緒の部屋になった。

晩ご飯が出来たので三人で食事をしている。

「ふうん…」

アスカは考え事してるのか、若干上の空でハンバーグを食べていた。

ちなみにコレは豆腐で作ったハンバーグで綾波でも大丈夫なのだ。

「…いつもと何かが違う」

アスカはそう呟いた。

「え？何の事？」

「ハンバーグよ。美味しいんだけど、いつもと何かが違うのよ」

「ああ、コレは豆腐で作ったんだよ」

「豆腐で!？」

アスカは目を丸くしてハンバーグを観察していた。

「はあ…。あんだ、そのままで良いんじゃない？エプロンも似合ってるし、そのまま誰かのお嫁さんとして嫁げば？」

「な、何言ってんだよ！」

「良いじゃない。家事能力も高いし、料理も上手だし。そのままなら引く手数多じゃない」

そう言ってアスカはハンバーグをほおばる。

「何なら、そのファーストのお嫁さんとして嫁げば？自分の身体だから問題ないでしょ？」

「え？」

僕は綾波を見た。不思議そうな顔をして僕の方を眺めていた。と言つか、自分の顔をこうやって見るのも不思議な感じた…。

確かに、変な男に嫁ぐより、自分の身体である綾波の方がまだマシである…って何を考えてるんだ僕は！？

僕は男なんだぞ！？お嫁さんとか…駄目だろ！

ひょっとして、身体が女の子だから精神が身体に引き寄せられてるのか…？

「だ、駄目だよ。いずれは僕と綾波は元に戻らないといけないんだから」

「ふっふうん？その割には満更でもなさそうに見えたけど？」

アスカはニヤニヤしながら僕の顔を眺めていた。

「私は碇君をお嫁にするのは構わないわ」

綾波、そこは否定して欲しかったよ…。

「あらあら、お似合いのカップルが出来たじゃない」

「あ…ぐ…」

「さて、と。あたしは風呂に入ってくるわ。ご馳走様」

アスカはそう言うリビングから出ていった。

その後、僕と綾波は何とも言えない空気の中、食事を続けるのであった。

綾波と二人で部屋の整理をしていると…。

「お風呂、空いたわよ」

アスカがやって来た。

「ああ、分かった」

そう言うアスカは自室に戻っていった。

「綾波、先に入って良いよ？」

「…」

綾波は首を横に振って僕の服の端を掴んで来た。

「えっ…と？」

「洗い方。変に洗ってキズ物になったら痛いし」

「へ？」

「一緒に入って教えてあげる。だから、碇君の身体の洗い方も教えて欲しい」

そう言つて綾波は僕の手を握る。

「ちょ、ちよつと!？」

こうして僕達は一緒に風呂に入る事となった…。

風呂上がり。

僕はのぼせて倒れそうになったよ…。

中で起きた事はちよつと語りたくないけど。  
僕と綾波は風呂上がりに牛乳を飲んでいた。

「たっ だいま」

玄関から聞こえて来るのはミサトさんの声。どうやら帰宅してきたみたいだ。

ドストスと言う足音と共にリビングのドアが開く。

「お、二人とも楽しそうにしてるじゃない」

「お帰りなさい、ミサトさん」

「お帰り…」

そう言うつと冷蔵庫からビールを取り出し、それを開けて一気に飲み干す。

「ぶはあゝ！！きくうゝ！！この一杯が最高よねえ！」

そして更に三本手に持って椅子に座った。

「…ん？」

ミサトさんは僕達の顔をジッと眺めだした。

「ふつふうゝん？二人とも、一緒にお風呂入ったんだ？」

「ぶふうー！！」

僕は牛乳を吹き出してしまった。

「お姉さんの目は誤魔化されないわよ？二人の髪の毛の乾き具合といい、顔の色といい」

そう言うつてミサトさんは僕が作ったハンバーグをパクついていた。

「で、どうだった？お互いお風呂に入って？」

実にイヤな笑いで僕達の顔を見てるミサトさん。  
エロ親父モードに入ったよ…。どうやって退散しようかな…。

「ゴホ、ゴホ…勘弁して下さいよ…」

「はい、碇君に洗い方をしっかり教わりました」

綾波、律儀に答えなくて良いから…。

「ほほおゝ？しっかりと教わったんだ？」

「はい。碇君が手を使って。そしたらまた大きくモガ…」

僕はまた綾波の口を手で塞いだ。

「いひやりふん？（碇君？）」

「そこは報告しなくて良いから…」

「わひやった（分かった）」

ゆつくりと手を離れた。

「で？シンちゃんはレイからしっかりと教わった？女の子の身体は  
繊細だからねえ？」

顔を赤くしてニヤニヤ笑ってるミサトさん。

「ノーコメントで」

「そつか。じゃあ、レイ？今度、あたしとお風呂に入りましょうか？」

「ミ、ミ、ミ、ミサトさん!!」

「ほらあ？ひよつとしたら見落としがあるかもしれないから？あたしが審査してあげるから」

駄目だこの酔っぱらい。このままだと本当に一緒にお風呂に入るかもしれない。

…でも待てよ？何でミサトさんが男の身体の洗い方を…？

「…？ミサトさん？」

「何かしら？」

「何で、ミサトさんが審査するんですか？ミサトさんは男の身体の洗い方を知ってるんですか？」

「ぐ…!!」

「…まさか、加持さんと一緒に入っててずっと練習してたとか…」

「な、何の事かしらねえ？」

冷や汗をダラダラかいてるミサトさん。

「じゃあ、別に綾波と一緒にいらなくても良いですね？」

「…そ、そうよね。あはははは…」

もの凄く乾いた笑いのミサトさん。  
やれやれ、コレで大丈夫かな？

「と言う事でシンちゃん、あたしと入りましようか？」

「ブフウ！」

本日二度目の吹き出し。

「ゴホッ！何が『と言う事で』何ですか！」

「だって？今のシンちゃんは女の子の身体だし？レイから教わったにしても見落としがあるかもしれないわよ？」

「大丈夫です！」

「ホントにいい？」

「ホントのホントですー！！」

「そつか。まあ、いつでも良いわよ。一緒にお風呂に入るの。レイも良いわよ？」

「ハイ、分かりモガ…」

「分からなくて良いから。入りませんからね、ミサトさん！」

僕は綾波を連れて部屋に帰る事にした。

「どうしてこうなったんだろ？」

僕は呟いた。隣では綾波が静かに寝息を立てて寝ていた。そう、僕と綾波はベッドで一緒になって寝ていたのだ。

まあ、僕が床で寝るにしても身体は綾波のだし。

綾波を床に眠らせるにも精神は綾波だからアレだし。

散々悩んだ挙げ句こうなった訳で。

「んん…碇君…」

綾波はそう呟いて僕に抱き付いて来た。

「ちょっと…コレは綾波の身体…」

そんなのはお構いなしに抱き付いて来るのであった。

### 第3話（後書き）

え？何コレ？

役得なの？シンジ君？w

さて、段々と何かが変わってきたこの世界

ちなみに、アスカはそこまでシンジの事を気にしてはいないようで

問題は、リツコとゲンドウでしょう

こちらのリツコは少しマッド入ってますw

ゲンドウは…

ま、そのうち現れますが…

読者の皆様は予想が出来る事でしょうw

それでは次回、お楽しみに

## 第4話（前書き）

おおぅ！

半分放置気味だったぜw

しかも今回はちよいと少ないかも…

## 第4話

今朝は何事も無く朝食の準備も終わり。

まあ、綾波が手伝ってくれたからね。

「今日は多分、シンクロ率テストがあると思うからちゃんとネルフに来てよね。」

そう言つて僕達はミサトさんと別れた。

学校でも別段変な事は無かった。

ただ、男子生徒の視線が変な風に思えた。

何だろう……？肉食獣に狙われてると言うか、狩人に狙われてる様に思ってしまうのは？

少し、背筋がゾツとした。

ネルフに無事に着いた。

プラグスーツに着替えてミーティング室に行くとそこに居たのはミサトさんと伊吹マヤさん。

「あれ？リツコさんは？」

「ああ、リツコね。本当にプツンして今日は病院で治療中よ。」

ため息をついてるミサトさん。マヤさんは苦笑していた。

「プツン…ですか」

「そうよ。今朝、研究室に行ったら大声で『出来たわ！とうとう出来たわよ！アハハハハハハハハハ！』とか、『これで世界は私の物よ！！』とか叫んでね…」

「うわぁ…」

アスカがもの凄くイヤそうな顔していた。

「あたしの姿見たら『丁度良かったわミサト。ちょっとこの薬を飲みなさい』とか言っ来て。目を見たらヤバそうな雰囲気漂ってたから思わず背後の回ってスリーパーホールで気絶させて病院に送ったのよ」

（→良い子は決して真似しないで下さい）

「そうですか…」

僕は何とコメントすれば良いのだろうか。

「と言う訳で、今日はリツコは不在で代わりにマヤがシンクロ率テスト行っから」

「分かりました」

こうして僕達はエントリープラグに乗り込んだ。

ちなみに、僕は零号機、綾波は初号機に乗り込んだのテストだ。

ここからはシミュレーション室の様子です。

「うーん…」

マヤは画面を見ながら唸っていた。

「どうかしら？」

「いえ、レイちゃんとシンジ君のシンクロ率なんですが…」

マヤは画面を指さす。

「二人とも一昨日のテストより遙かに落ちてるんですよ…」

「レイが20・8%でシンちゃんが21・9%？何よ、一昨日の半分以下じゃないの！」

「ですよねえ。やっぱり人格が入れ替わったのがいけないんですね？」

ちなみにネルフ職員達はシンジとレイが入れ替わったのは知っている。知らないのはゲンドウと冬月だけである。

「んー。アスカは相も変わらず83・7%か…。計器の故障では無いわね」

「コレだと使徒が来たとき大変な事になりますよ…」

「そうね。シャレにも何にもならないわ。とりあえず、二人を入れ替えてみましょう」

「わかりました。『みんな、とりあえず、上がった』」

シンジ視点に切り替わります

「どうでした？」

僕はミサトさんに訪ねた。

「残念だけど、駄目駄目状態ね。この状況で使徒が来たら二人とも秒殺だわ」

「え……」

「シンジ君が21・9%、レイちゃんが20・8%。一昨日の半分以下なの」

「あらあら、二人ともそろそろお払い箱かしらねえ？」

アスカがニヤニヤしながら僕達の方を見ている。

「……」

綾波が少し悔しそうにしていた。

「と言う訳で、二人とも機体を乗り換えてみて。レイは零号機でシンちゃんも初号機。良いわね？」

「分かりました」

「はん！機体を入れ替えても一緒よ！」

アスカの台詞を後目に僕はエントリープラグに乗り込んだ。

たびたびですがシミュレーション室の様子です。

「コレは…」

「凄い…」

ミサトとマヤは驚愕の表情でモニターを見ていた。

「…はあ？」

アスカもモニターを見て啞然としていた。

「レイちゃんが91.5%でシンジ君が97.9%…。これはもうタイムロス無しでエヴァを動かせるレベルです…」

「そうね…。まあ、痛みも相当になるけど…。コレなら大抵の動きに対処出来るわね…」

二人は興奮冷めやらぬ顔でモニターを見ていた。

アスカは悔しそうに齒ぎしりしてモニターを見ていた。

シンジ視点に戻ります

「今度はどうでした？」

「今度はバッチグーよん。以前より良いから、いつその事そのまま  
でいた方が良くないんじゃない？」

「いやいやいや、それは困りますよ……」

「私は構わないけど……」

「いや、構ってよ綾波……」

「調子に乗るんじゃないわよ……！あんた達なんて、元に戻ったらあ  
たしの下なんだからね！」

アスカは地団駄踏んで暴れていた。

「アスカ……」

「ふん！見てなさいよ！今にあんた達の記録なんか抜き去ってやる  
んだから！」

そう言うときアスカは出て行ってしまった。

「あちゃあ…。そりゃ、身体が入れ替わっただけであっさり抜き去るんだからね。アスカもキレルわ」

「えっと、どうしようか…?」

「そうね、今日はリツコも居ないし。上がりにして頂戴」

「分かりました」

シャワーを浴びて僕と綾波は地上に出た。  
出入り口ではアスカが待っていた。

「あ…」

「…フン。ほら、帰るわよ」

アスカは背を向けて歩き始めた。

今日はミサトさんは定時に終わって帰ってきた。  
四人で夕食を食べた。

例によってミサトさんはビール片手にエロ親父モードに入っただが、アスカが八つ当たり気味にミサトさんをハリセンで叩いていた。

「あゝ、すっきりした」

とはアスカの言葉。上司に当たる人をそんなにバシバシ叩いて良い

物だろうか。

その後はいつものように風呂に入って就寝した。  
僕は綾波と一緒に…。

#### 第4話（後書き）

何だろう。

今回はそんなに笑えるネタは無かったような。

ちなみにリッコがミサトに差し出した薬の色は紫と濃いピンク色ですw

どうみてもろくでもない結果にしかない薬w

もうちよいはっちゃんける予定だったのだが…。

まあ、引き続きシンジ君の受難(?)は続きますw

## 第5話（前書き）

連続投稿！

おやおや、少しずつ何かがおかしくなってきたますなw

ネタはそれなりにあるのですが、書くのが間に合わないというw

とりあえず、どうぞ！

## 第5話

学校もいつも通りに終わり、僕達はネルフにやって来た。

「来たわね」

ミーティング室に現れたのは昨日病院に運ばれたハズのリツコさん。どうやら無事に退院出来たみたいだ。

「昨日はごめんなさいね。気が付いたら病院のベッドで『知らない天井だ』って呟いていたの」

「すみません、それは僕の台詞なんですが。」

「そ、そうですね…」

「でも、無事に完成したから…早速開始するわよ」

と言う訳で僕達は違う部屋に移動した。

来たら妙な機械が鎮座する部屋だった。

ちなみにアス力はマヤさんと一緒にシンクロ率テストで僕達と別れた。

両側には美容院でパーマをかける様な機械で上に沢山のコードが繋がっていて。

真ん中にパソコンの様なキーボードとディスプレイが見える。

よくは分からないけど、コレが僕と綾波を元に戻す機械なのだろう。

「それじゃ、シンジ君とレイはその椅子に座って」

リツコさんはそう促す。

僕と綾波は指示に従って椅子に座った。

「それじゃ、開始するわよ。『理論上』なら二人は元に戻るからね」

あの、理論上と言うのは凄く不安なんですが…。

「ちょっとリツコ！何であたしを呼ばない訳!？」

部屋に飛び込んで来たのはミサトさんだ。

「別に貴女がいなくても問題は無いわ。それとも、加持君と協力してくれるの？この機械の」

「…何であたしがあんなヤツと…」

「この機械は男と女 of 精神しか入れ替え出来ないの。となると、貴女と加持君しかないじゃない」

「…分かったわよ。良いからさっさと始めなさい」

ミサトさんはブツブツ言いながら椅子に座って色々なパーツが置いてあるテーブルを眺めていた。

「ここでごうなって…」

リツコさんは紙を眺めてキーボードを叩いていた。  
5分位経過したところでリツコさんは手を止めて僕達を見た。

「それじゃ、エンターキーを押すと開始するわよ」

そう言つてリツコさんはボタンを押した。  
ブウンと言う鈍い音を立てて機械は動き始めた。

「ねえ、リツコ?」

「どうしたの、ミサト?」

「何かね、ちょっと気になつたんだけど」

「何が?」

「コレなんだけどさ...」

ミサトの手にある謎の基盤。

「...」

一瞬にしてリツコの顔がこわばる。

「ちょっと、リツコ?」

「...大丈夫よ?大丈夫...」

ミサトから目を逸らすリツコ。その頬に流れる汗。

「大丈夫じゃないでしょ、あんた！」

「大丈夫よ。死ぬ事はないから。ただ、どんな結果になるか分からなくなると言うか……」

「何処が大丈夫なのよ！」

…何だろう？ミサトさんとリッコさんが言い合ってる様な…。  
そうこうしているうちに僕の意識は遠のいていった。

「う……」

気が付いたら目の前には苦笑いを浮かべてるミサトさん、リッコさんの二人。

「気が付いた？」

「はい……」

僕は身体を起こす。

「…アレ？服がキツイ……」

身体を見ると中学の女子制服。

「…戻ってないんですけど？」

僕はリッコさんの顔を見る。

「いや、それがね……」

「はつきり言いなさいよ。あんたのミスでしょうが」

「ちよつと、ミスでね」

そう言うところこそさんは手鏡を渡してきた。

┐  
?  
┐

僕は何気なく手鏡を見た。

⌈  
^  
?  
⌋

鏡に映ったのは綾波。だが、どう見ても20歳位の雰囲気は漂っていたのだ。

そして僕は綾波の方を見た。

やはり同じように大人になった僕が座っていた。

ちなみに服が凄くきつそうでズボンとかシャツのボタンは外されていた。

「ええええええええええ！？」

僕はびっくりしたよ。

身長が180?位で物静かそうな雰囲気漂っていて、男の顔と言

うより中性的で女装させても違和感が無い。

ちなみに僕は150?を超えた位で身体はスレンダー気味だけどしつかりと女性らしい身体になっている。

「コレが碇君の将来…」

綾波…しみじみと僕の顔を眺めないでよ…。

「まったく！あんたロクな事しないじゃない！」

「五月蠅いわね！横でゴチャゴチャ言わないの！」

ミサトさんとリツコさんは言い合いしながら機械を修理していた。

最も、ミサトさんはリツコさんに言われたパーツとか工具を持ってくるだけで主にリツコさんが修理しているのだが。

「ほら、さつさと修理なさい！早くしないと月に代わってお仕置きするわよ！」

「ミサト、あんたがその台詞言つと色々と拙いから言つのを止めなさい！」

「あんでよ？」

「大人の事情よ」

二時間後。

僕と綾波は同じ様に機械に座っていた。

「さあ、コレで大丈夫よ」

リッコさんはそう言って機械のセットを始める。

「ったく、しっかりして頂戴よ……」

ミサトさんは呆れ顔である。

リッコさんは先程と同じ様にキーボードを叩いてデータを入力している。

「それじゃ、開始するわよ」

そう言うところエンターボタンを押す。また同じ様に鈍い音を立てて機械は動き始めた。

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

突然、室内に響き渡るブザー。

「リッコさん？」

「動いちゃ駄目よ、シンジ君」

リッコさんは青い顔してキーボードを叩いていた。

「ちょっとリッコ！また何やらかしてんのよ！」

「五月蠅いわよ、ミサト!」

さっきと同じ様にミサトさんとリツコさんが言い争う光景を見ながら僕は意識が遠のいていった…。

「うん…」

目を覚ますとリツコさん、ミサトさん、そして…僕がいた。

「戻っていない…」

そう呟いて身体を起こした。

「いえ、何と言うか…」

そう言うとミサトさんはまた手鏡を渡してきた。

「?」

手鏡を覗くと…。

「…綾波?」

鏡の中に見えるのは確かに綾波。何だけど、真っ黒い髪にこげ茶色の瞳だった。

「どっいつ事ですか？」

僕はリツコさんを見た。

「…」

「ほら、早く言いなさいよ」

「ちょっと、プログラムミスでね…ホホホ」

「何がホホホよ」

「シンジ君の髪の色と瞳の色がレイに移動して…」

「移動して？」

「レイの性別がシンジ君に移動したの」

「へ？」

僕は綾波を見た。

胸を見ると、膨らんでいた。

「僕の身体が…」

「…問題ないわ」

いや、問題大ありだよ…綾波…。

見ると機械から真っ黒い煙が上がっていた。

「ごめんなさいね。徹夜で復旧するから今日はそれで勘弁して」

リツコさんの拝む姿は滅多に見られないな。

僕はそんな事を思っていた。

「わ、分かりました…」

ちなみに、身体は元の年齢に戻っていたけどね。

こうして、僕と綾波はアスカと待ち合わせてる場所に行った。

「うわっ あんた誰よ！」

アスカが開口一番に言ったのはそんな台詞だった。

「僕だよ」

「…何だ、戻ってないじゃない」

「色々とあってね」

「ふうん…ってファースト？あんた…何か…雰囲気が…って胸が膨らんでるじゃない！」

ビックリしてアスカは綾波の胸の部分を見ていた。

「全く、あんた達もとんだ災難ねえ…」

「あはは…」

「しかし、あんた達…同性になったら何か…似てるわね…」

アスカはジト目で僕達を見ている。

「そうかな？」

「似てるわよ。よく見たら細部はちょっと違うけど、双子って言うても通用するわよ」

「そうかなあ…」

僕は綾波の方を見た。

言われて見たら、似ているかもしれない。

何でだろ？僕と綾波は血は繋がっていないのに…？

僕はそんな事を思いつつ帰路についた。

いつもの様に夕飯を済まして。

アスカはいつも一番風呂に入る。

そして、アスカが出た後にそれは起きた。

「碇君、一緒にお風呂に入りましょ」

綾波がいきなりそう言った。

「へ？」

「お風呂。碇君の身体だからどうなったのか確認が必要でしょ？」

「いや、あの、綾波の身体で充分確認をしたと言っか…」

「私の身体と違うところがあるかもしれないでしょ？」

いや、女の子の身体をそこまで観察するのは僕の精神に色々ダメ  
ージが…。

「せっかく同じ身体になったのだから背中を流し合いとか…」

何だろう…。まるで、小さい女の子がお父さんと一緒に入りたい…  
みたいな雰囲気を感じる。

「…分かったよ、綾波。一緒に入ろう」

こうして僕と綾波は一緒にお風呂に入る事となった。

ちなみに、身体のサイズは見た感じほとんど一緒だったと言う事を  
報告しておく。

ああ、僕の身体が…。

## 第5話（後書き）

どうしてこうなったw

しかし、リッコさんとミサトさんの「コソ」はちょっとぐじぐじと書きやすいかもしれないな…

無事に戻るのかシンジ君！w

次回をお楽しみに！

## 最終話（前書き）

さて、これはあくまでもギャグ小説です

長々と引つ張つても仕方ないのでここら辺で終わりとしましょうか。  
ま、ぶつちやけ言つとあくまで試しで掲載した短期ものだったので  
すからね

それでは、どうぞ!!

## 最終話

朝食は滞る事無く終わり。

ちなみに、ミサトさんはリツコさんに強制的に付き合わされて明け方に帰って来たみたいだ。

昼過ぎに出勤するから起こすな。起こせば月に代わってお仕置きよ！…と書かれた紙がテーブルの上に置いてあった。

あえてツツコミは入れないでおこう。

そして、いつも通りに僕達は登校する。

何だろう…？何か、重大な事を忘れているような…？

「忘れてた…綾波の身体は今は女の子だったんだ…」

教室に着いてから思い出した。

ちなみに、綾波はきちんと男子制服を着ている。

でも、胸のわずかな膨らみの事は考慮してなかった。

幸い、アスカみたいに大きい訳じゃないからよほど見ないと気づかない…と思いたい。

「アンタ、今エツちな事思わなかった？」

アスカが半目で睨んで来る。

心を読むのは止めて貰いたいんだけど。

「いや、気のせいだよ、アスカ」

「ホントに？」

「ホントのホントだよ」

「まあ、良いか…」

そう言っアスカは洞木さんの所に向かった。

僕と綾波はそれぞれの席に行っ荷物置く。

そうすると、トウジとケンスケがやって来た。

「おはようさんって!？」

「な、何だ!？碇、お前…髪の色が…」

「おはよう…」

「おはよう、トウジ、ケンスケ…ちょっと、昨日事故でね…」

「はゝ大変やな…」

「どんな実験だったんだ…？」

そうつぶやきつつもトウジとケンスケは綾波の方を見る。

「…？」

「……？」

何だろう。凄く、イヤな予感を感じるんだけど…。

「何や…綾波…いや、センスの身体のハズなんだけど…」

「何だろう？何か…食指が動くと言っか…女の子みたいな何かを感じるんだが…」

何でこんな時に限って無駄な勘が働くのか。

やはり、僕と綾波は休むべきだったなあ。

「な、何言ってんだよ！僕の身体だよ？男に決まってるじゃん！」

「そうかあ？何か、碇…お前と一緒に並んできると…双子の様に見えるんだがなあ…」

ケンスケの眼鏡が妖しく光る。

「それに、センスの身体は確かに細かったが…今はまるで女の子の様な細さなんだが…」

頭の天辺からつま先までジロジロと眺めてるトウジ。

「それに、胸元が何か…膨らんでる様な…」

そう言つてケンスケは綾波の胸元をつつく。

ふよん

「…え？」

「何するの？」

ケンスケは目を白黒させていた。

「どないしたんや？ケンスケ？」

「ちょっと待て。碇、何で…お前の胸が…こんなにや、柔らかいんだ…」

顔が真っ赤になるケンスケ。

「綾波、僕の後ろへ」

綾波は僕の後ろに回る。

「…説明して貰おうか…碇」

口元がつり上がった笑み…邪悪な微笑みを浮かべてケンスケは僕に寄ってきた。

こうなつては仕方がない。二人に話すしかない。

説明中

「ほほう……」

「それは…また漫画みたいな出来事になつたなあ…」

二人は腕組みしてウンウン頷いていた。

「まあ、あんまり言いふらさないでくれたら有り難いかな…」

「ええで！ワシらは友達やからな！」

「おうよ！」

二人は腕組みしていた。

「…碇君…今日は体育がある…」

「え…」

綾波の台詞を聞いて僕は背中に冷や汗が流れ始めた。

「おおよ。前回同様に綾波はワシらがきちんと教えたる！」

「だから碇は心おきなく水泳に行つてくれ！」

二人の鼻の下が伸びていた。

明らかに僕の身体を観察しようと言つ氣が満々だった。

「な、何言つてんだよ！綾波は今日は休みだよ！」

「碇！仮病はいかんぞ！綾波はどう見ても健康そのものじゃないか！」

「……そうだそうだ！」「……」

氣が付いたら男子達が僕達の周りを囲んでいた。

「なっ！？」

「こんな良い機会はないぞ！」

「碇の身体は我々がきちんと管理しておく！」

「だから気にせず泳いで来い！」

男子全員の目が野獸の様に見える。

駄目だ、このままだと僕の身体が傷物になってしまう。

逃げちゃ駄目だ…逃げちゃ駄目だ…逃げちゃ駄目だ！

「何を朝からバカな事言つてるのよ！竜巻。風脚！！」

アスカが乱入して男子生徒達を吹っ飛ばす。

「鈴原あ！何をいかがわしい事を考えてるよお！見たいんだったら私を見せてあげるわよお！」

洞木さん、何気に凄い事言ってますんか？

「うお！何でワシが委員長の…胸なんぞ！」

「五月蠅い！アスカ、アレをやるわよ！」

「アレ…ね？」

「ええ、アレ…よ？」

その刹那、アスカと洞木さんの姿が消えた。

「「必殺！マッスル。ツキング！！」」

「「うぎゃああああ！！！」」

トウジとケンスケは…なんだろう、某有名筋肉ムキムキ超人が出る漫画のコンビネーション技を喰らっていた。

見なかった事にしよう。うん、そうしよう。

学校も無事に終わり。

僕達は例によってネルフに向かっていた。

ちなみに、綾波は体育は休んで貰ったよ。

あんな、飢えた狼の群の中に羊を放り込む様な真似はしたくないからね。

さあて、どうなる事か…。

ネルフに着くと昨日の部屋に行くように指示される。

アスカはまた例によっていつものシンクロ率テストとシミュレータ―訓練だ。

まあ、アスカは今回の件に全く関係ないもんな…。

部屋に着くと昨日と大して変化の無い…いや、少しちがった感じにレベルアップしていた。

そして、ソファア―ではリツコさんが眠っていた。

どうやら、昨日の作業で疲れたのだろう…。

「やっと来たわね」

ドアが開くと現れたのはミサトさん。

「ほら、起きなさい、リツコ!」

そう言っていきなりハリセンでリツコさんの顔面を叩くミサトさん。

いくら友人と言ってもその所行はどうかと思いますが。

「いたた…いきなりこんな事するのはミサト…ね」

顔に手を当てて起きあがるリツコさん。

「あら、来てたのね。無様な姿を見せたわね…」

ソファーから立ち上がり、服をはらう。

「さあ、完全に修理して完成したわよ」

見た目変わらない機械が鎮座していた。

「言っても外見上は何も変わってないけどね」

「ちょい待ち」

「どうしたの?ミサト?」

「あなた、確か…この機械は男と女の間精神しか変えられないって言うたわよね?」

「大丈夫よ。きちんとその辺も変更してあるから」

「それなら良いけど…」

そう言つてミサトさんは椅子に座つて、いつの間にか入っていたコーヒーを啜りだした。

「それじゃ、昨日と同じ様にそっちの椅子に座つて頂戴」

僕と綾波は機械の方に向かつて行つた。

「それじゃ、開始するわよ」

リツコはそう言つて機械を起動させる。

ヴオオンと言う重い音が室内に鳴り響き、リツコはキーボードを力タカタと叩いていた。

「コレでようやく二人が元に戻るのねえ」

とミサトはコーヒーを啜りつつ作業するリツコの背後に回つた。

「あ」

「…ちよつと?」

リツコの妙な発言にミサトの頬に冷や汗が流れる。

「いえ、何でもないわよ？ミサト？」

「待ちなさい。妙に声がうわずってるじゃない」

「き、きき、気のせいよ？」

「なら、何でもるのかしら？」

ボンッ！

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

室内に鳴り響く爆発音と警報音。

「…」

リツコの手の速さが三倍に上がった。

まるで六本の腕があるように。

「アンタ…二度ある事は三度あるを実践してんじゃないわよ！」

「黙ってなさいミサト！プログラムは変更してたけどすっかり機械の方の組み替えを忘れてただけだから」

「すっかりじゃないわよ！アンタそれでも科学者なの！？」

「…」

僕は非常に不安になりながらミサトさんとリツコさんの様子を見ながら気を失っていった。

「うん…」

気が付くとまた同じ様に苦笑いのリツコさんとミサトさん。

「…戻ってないんですね」

僕はそう呟いて手を眺めた。

「…！ひょつとして、また大人になったんですか！？」

「『ご名答』」

そう言ってミサトさんは手鏡を僕に渡して来た。

「…これは…」

鏡を見て愕然とした。

20代前半から半ばくらいの綾波が写っていたから。

「綾波…は…」

綾波の方を見て僕は更に愕然とした。

僕と同じ様に20代前半から半ば位に成長していて、何故か…僕より胸がちよつと大きかったから。

きつかったらしく、Yシャツのボタン、上から三つまでははずしていたから谷間が見えていた。

…何で…僕の身体の方が胸が大きいんだろう…。

何となくやるせない気持ちになっていた。

「うわ…シンちゃんの身体の方が大きいんだ」

そう言ってミサトさんは綾波の胸をつついていた。

「コレは興味深い結果になったわね」

腕を組んで眺めているリツコさん。

「…重たい…」

そう呟くのは綾波だった。

「ふっふうん…コレはDからEカップで…シンちゃんは…BからC位ね」

「ミサトさん!？」

ミサトさんは僕の胸を揉みながらそう言い放った。

「んん？コレはいい弾力ね。柔らかいけどしなやかな弾力が…」

「どれどれ？へえ…コレは」

そう言ってリツコさんまで僕の胸を揉んでいた。

「ちょ、ちよつと！？」

「…確かに。私のと違う」

綾波も自分の胸を揉みつつ僕の胸を揉んでいた。

「わー！みんなで何してんだよー！」

その時、部屋のドアが開いた。

「終わったかしら、バカシンジにファースト…」

「先輩、どんな状況…」

部屋に入って来たのはマヤさんとアスカだった。

二人の表情は固まっていた。

「あの…コレは…」

「…な、な、な、何…やってんのよ…アンタ達…」

「…ずるいです…先輩…私の胸も揉んでくださいよ！」

マヤさんが何かトンでもない台詞を言ってるような気がするんですが。

「いえ、コレは…ちょっと…検査よ、検査！」

言い訳にしては苦しいですよ、リツコさん…。

「はあゝ大人になるとこんな感じになるのねえ…」

アスカは僕と綾波を交互に眺めていた。

「しかし、シンジ君が女の子になるとこんな感じになるんですね…」

妙に艶めかしい視線で綾波を見るマヤさん。

何だろ…背景に百合の花が見えるのは僕だけだろうか？

「で、どうすんのよ！直すアテはあるの！？」

「安心なさい、こんな事もあるつかと、基盤は既に作ってあるから」

そう言ってリツコさんは机から妙な基盤を取り出していた。

「ならさつさと取り替えなさいよ！」

ミサトさんはハリセンでリツコさんの頭を叩いていた。

「痛いわね！せっかく科学者なら言っておきたい台詞？1の『こんな事もあるつかと』を言ってたのに！」

「バカな事言っていないでさつさと変えなさい！」

「何だね、騒々しい」

「…」

ドアが開き、中に入ってきたのは…父さんと冬月副指令だった。

最近、姿を見なかったけど…何処に行ってたのかな。

「葛城君と赤木君を探していたのだが…」

「聞くとシンジ君とレイに何か起きたと報告を受けているのだが…」

そう言っ僕と綾波の方を見た。

「…！」  
「…！」

目線が合つと父さんと冬月副指令の表情が固まった。

「…」  
「…」

驚愕の表情でその場に固まってる冬月副指令と…ゆっくりと近づいて来る父さん。

何だろう…凄く…妙な…予感を感じる…。

僕はゴクリ…と唾を飲み込んだ。

「ユイユイユイユイユイユイ」

「……………」

そう叫び声を上げて僕に抱き付いて来る父さん。

「わ……………っ!？」

「ユイ、私だ!そうか、帰ってきたのだな!」

僕の頬をほおずりしてくる父さん。ヒゲが凄く痛いです!!

呆然とその光景を見ている他の方々。

「お前が帰ってきたのならコレで良い!人類保管計画は中止だ!」

「…お、おい…碇…」

「冬月!お前も構わんだろう!む!?何と、そっちにもユイがいるじゃないか!」

綾波の方を見て更に目を輝かす父さん。

「しかも…胸が大きい!が、コレはコレで有りだ!ユイの胸は少し

モノ足りないと思うときがあつたが、このサイズなら最高だ!」

「…お、お前は…」

「冬月、お前もユイと肌を重ねたいと言つていただろ! 今晚はそつちのユイで満足させて貰えば良いじゃないか!」

「な!??」

冬月副指令の表情が一変する。

周りの視線が実に冷ややかになっていくのが僕には分かった。

そう、あの綾波でさえ…冷たい眼差しに変わっていたのだから。

「…サイテー」

「…こんなのと肌を重ねていたなんて…」

「不潔です…」

「こんなのが父親だなんて…今度から少し同情しようかしら…」

「……」

順にミサトさん、リツコさん、マヤさん、アスカに綾波。

綾波の無言が怖いです。

「バカな事を言つな! 俺はただユイ君と教師と教え子と言つたな…」

「嘘を言つな! 前に酒を飲んだ席で『ユイ君と一晩お付き合いした

いなあ…』と言つてたじゃないか！」

「ええい！酒で飲んだ席の事など覚えておらんわ！」

「何だと！それならこの二人のユイを貰つて良いんだな！？」

「貰う以前に、何でここにユイ君が二人いるのか気にならんのか！？」

「そんな些細な事はどうでも良いんだ！結果さえ出ていれば私は構わん！」

しっかりと抱きしめて僕を離そうとしない父さん。

父さんって、意外と力があるんだね。と言うか、火事場の馬鹿力？

「ええい！この男は…！ユイ君に似た人を見て暴走しておるな！」

「ユイに似た人ではない！双子のユイだ！双子丼だ！」

何だろう…父さんが…可哀想に見えてきた。

「コレでは話にならん！」

冬月副指令は右手を高々と挙げて…パチン…と鳴らした。  
と同時にドアが開いて…妙な仮面を付けた男二人が入ってきた。

「な…！？」

驚くと同時に父さんの首に当て身を喰らわせる。

「う…！」

呻き声を上げて父さんは気を失った。

一緒に倒れそうになるが仮面を付けた怪しい二人組が支えてくれた。

「あ、ありがとうございます…」

「碇を連れて行け」

冬月副指令が仮面二人組に指示すると僕から父さんを引きはがし、担いであつという間に出ていつてしまった。

「アレが…副指令直属隠密部隊…『ネオ・アトランティス』…」

「初めてみたけど…凄いわね」

リツコさんとミサトさんが呆然と眺めていた。

「…」

声も出なく啞然とした表情で光景を眺めてるアスカとマヤさん。

「全く…ユイ君の事となるとあの始末だからな…」

衣服を正して僕達の方を見る冬月副指令。

「で、何がどうなったのか…説明して貰えないかね？」

説明中

「なるほど…ややこしい事になってるな…」

顎に手を当てて考えてる副指令。

「はい。今から、元に戻そうかと…」

「うむ。せめて、年齢を元に戻すだけでもしてくれ。このままだと碇が使い物にならない」

「は、はい…」

口元にやけてるリツコさん。

ミサトさんも肩を震わせていた。

「しかし…」

副指令は僕達の方を見ていた。

「シンジ君」

「はい」

「君は母親似だな」

「え？」

「見て分かっただろ？碇のあの姿。君は父親には一切似てない」

「はあ……」

「と言うか副指令？今のシンジ君はレイの身体なんですよ？」

「……おお！そうか、そうだったな……うん……」

やたらとしどろもどろになる副指令。

「では、私はお暇するよ」

そう言っつて副指令は足早に部屋から出ていった。

ちなみにゲンドウは自室で目を覚まし、『知らない天井だ……』と呟いたとか何とか。

今度はマヤさんもいるから修理は早かった。

リツコさんとマヤさんが仲睦まじく修理を行っている。

「ねえ、赤木博士？」

「何かしら？」

アスカはおもむろにリツコさんに話かけていた。

「二人がこうなった…と言う事は。上手く調整すれば大人になれるんでしょ？」

「そうね。確かに可能よ」

「やった！」

指を鳴らすアスカ。どうやら、大人になりたいみたいだけど…？

「その代わり、アスカが20歳になった時は…25、6歳…下手したら30歳位になるわよ？」

「う…」

それはそうだ。それだけ年を増やすのだから。

「早く老けたいならやってあげるけど…」

「いえ、遠慮しておきます！」

アスカはあっさりと引き下がった。

「さあ、今度こそ出来たわよ」

二時間かけて修理が完了した。

「これが二度目の正直ね」

「何言ってるの。四度目じゃない」

「く…」

「ま、まあ…ほら、シンジ君にレイちゃん。二人とも座って」

僕と綾波はマヤさんに促されて椅子に座った。

先程と同じ様にヴィイインと言う重い起動音を立てて機械が作動し始めた。

今度は大丈夫そうだ。

変な爆発音も警告音も鳴らない。

そうして僕は気を失っていった。

「うん…」

目を覚ます。

さっき座った位置と違う。どうやら成功したみたい？

「成功…したみたいですね？」

僕は下を見る。男子制服が目に入った。

「うん…胸も無い」

胸をペタペタ撫でる。股間も撫でたかったが、それはさすがに止めておいた。

「綾波も…」

僕は振り返った時、目を疑った。

確かに元の年齢に戻った綾波がいたのだが。

髪の色は黒で瞳の色はこげ茶と変わっていなかったから。

「…綾波…だよね？」

綾波は首を縦に振った。

「どうしても、戻らなかったのよ。それと…シンジ君…」

リツコさんは手鏡を渡して来た。

「…え？」

覗き込んだとき…僕は啞然とするしか無かった。

顔が全く戻っていなかったから。女の子顔のままだったから。

「…」

「あら」

目を輝かせるマヤさん。何だろう…凄く、妙な視線が。  
肉食獣が獲物を見つけた様な…そんな視線。

「…」

アスカもジッと見ていたが。

「…まあ、こっちの方が良いかもね」

少し顔が赤くなっていた。何でさ!?

「リツコさん…」

「じ、ごめんなさいね…これ以上は…どうにもならないのよ…」

「え…」

「ほらほら、身体は男に戻ったんだから。よしとしなさいよ」

そう言ってミサトさんは背中をバシバシ叩いてきた。

まあ、男に戻った分だけマシと考えるかな。

このままやってたら取り返しのない事になるかもしれないし。

「…分かりました」

納得する事にした。

「さあて、やっとゴタゴタも終わったし…」

「そうね。ほら、シンジにファースト。帰るわよ」

アスカは部屋から出ていった。

あれ…？僕の呼び方が…変わった？

首を傾げるしかなかった。

この日を境に何かが…変わっていった。

まずは綾波。

元に戻ったけど、一人暮らしはイヤと言う事でミサトさんの所で…  
と言いたかったけど。

部屋が無い状態だったので、隣の空き部屋をネルフで借りて住む事に。

その際、僕も来て欲しいと言われたけどさすがにそれは…と言う事

で断ってはおいた。

ミサトさんとしては『全く構わないから、毎日来て綾波とどんな事をしたのか事細かに報告する事』とか訳の分からない事を言ってきたのでなおさら僕は断った。

と言う訳で白羽の矢が立ったのはアスカだった。

「ファーストと…か。まあ、シンジと一緒に住まれるよりは遙かにマシだわ」

と言って引っ越しとなった。

ちなみに、中を一部改造していちいち玄関から来なくても良いように壁を一部隠し扉風にしたのだ。

これで、アスカと綾波はいつでもこっちに来られる様になった。

アスカは何故か妙に優しくなってきた。

時々、顔を真っ赤にして何やらブツブツ呟いている事もある。

「コレはいい優良物件よね…うん。料理も上手いし、顔も…悔しいけど可愛いし…」

最後の方は聞かなかった事にしておこう、うん。

学校に登校したら、全員から妙な熱い眼差しが。

「こんなに可愛い子が女の子なわけじゃないじゃないか！」

「おうよ！これはワシ等の出番や！」

とケンスケ、トウジ以下の男子が暴走。

「巫山戯ないで！碇君の性別は『シンジ』よ！男な訳無いじゃない！」

「碇君の貞操の危機よ！」

とこれまた洞木さん以下、女子も暴走。

わずか一日にして『碇シンジを愛でる会』と『碇シンジの貞操を守る会』の二つが発足。

ちなみに、愛でる会の全員が男子生徒で貞操を守る会が全員女子と  
言う始末。

そしてそれは、全校生徒を巻き込む争いになるのは…近い将来の話。

ネルフに行ったら。

オペレーター三人組の人は。

「コレは…」

「いかんね、シンジ君。まあ、僕は葛城さん派だがね」

「シンジ君…今度…デートしない？」

鼻を押さえる青葉さん、腕を組んでウンウン頷いてる日向さん、そして…顔を真っ赤にしてやや息が荒いマヤさん。

ちなみに鼻を押さえてる青葉さんの手から血らしき赤い液体が。見なかった事にしよう…。

「駄目よ、マヤ。シンジ君は今度私の実験に付き合って貰う予定だから」

現れたのはリツコさん。

ええ？そんなの初めて聞きましたよ？

「ええ〜？センパイは碇指令とデートだったんじゃないんですか？」

「あんなヒゲはもうどうでも良いの。これからは…男の娘の時代よ？」

何だろう？聞いていて言葉のニュアンスが…違う。

「保護者の許可無く勝手な事言わないの！シンちゃんはあたしのモノよ！」

「何言ってるの。30前のオバさんが半分にもならない男の娘の保

護者になってはいけないと言う条例があるのよ？」

「そんな条例は初めて聞いたわよ！」

「そうです。葛城さんは加持さんとイチャラブしてれば良いんです！」

「誰があんな無精ヒゲと！」

こんな感じだったので僕は逃げる事にした。

この時ばかりは逃げちゃ駄目だ…と言う事は出来なかった。

「よ、シンジ君」

自販機でジュースを飲んだと現れたのは加持さんだった。

「あ、加持さん…」

「ほほお…これは。確かに。噂では聞いていたけどね」

「あ…」

ジロジロ見る加持さんに少し、恥ずかしくなってきた。

「…良いねえ」

「…え？」

「ふむ…葛城の保護より、俺の保護が良いじゃないか？」

「え…？え？」

「よし、早速葛城と交渉してみよう」

「え？」

「馬鹿な事言ってるんじゃないわよ！」

「そうよ！加持君！貴方、そのまま食べるつもりでしょう！」

そう言って現れたミサトさんとリツコさんに…。

某マスク狩り超人が使用した『クロ。ボンバー』と言う技を喰らって加持さんはそのまま医務室に直行した。

一番変わったのは父さんだった。

「シンジ。今度から一緒に住まないか？」

「え？」

指令室に呼ばれたと思ったらいきなりこんな事を言われた。

隣に立っていた副指令は眉間に指を当てていた。

『駄目だこりゃ』

不意にこんな台詞が聞こえてきたような。

「今まで放って置いてすまなかった。今度からは一緒に住んで、一緒に風呂に入って、一緒に寝よう！」

おもむろに父さんは立ち上がって僕に近づき、手をしっかり握ってきた。

凄く、怖いんだけど！

「この際、お前の性別が男であろうと構わん。一緒に過ごそう！構わんだろ！？な！？」

段々と顔が近づいて来ます。助けて…誰か…！

「全くお前は…」

そう言つと副指令の手が高々と掲げられ、——パチン——と鳴り響く。

「冬月、貴様！俺とシンジの仲を！」

「少し頭を冷やせ、碇」

天井からまた仮面を被った男二人組が現れて父さんを気絶させるとそのまま担いで司令室から出ていった。

「すまんね、シンジ君。何とかして、アレは矯正はしておくが…ね」

「あ、ハイ…」

「まあ、あいつも可哀想な所もあるからね。出来れば、嫌わないくれ」

「あ、分かりました…」

その後、聞いた話では父さんの株は女子職員の中では暴落しているとの事。

何だろう…少し、同情したくなってきた。

そして…。

その後、何故か使徒は現れなくなった。

平和が戻った…のかな？

釈然としないけど、これで良いかな。エヴァに乗らなくて良いから。

3ヶ月後。

学校の生活はあいも変わらずと言った所か。

転校生の霧島マナさん山岸マユミさんと渚カヲル君。

三人とも何故か僕の事を大層気に入ったらしく。

毎日昼になると弁当のお誘いが。

無論、アスカと綾波も一緒に。

トウジとケンスケも一緒に来ようとするけど、洞木さんにいつも連行されてる。

「鈴原は私と一緒にご飯を食べるの!」

「離せ! いいんちょう! ワシは碇を見守らにやいかんのじゃ!」

「お、俺は恒例の写真撮影を…!」

いつもの事であった。

更に一ヶ月後にはエヴァ初号機から母さんが、弐号機からはアスカのお母さんがサルベージ。

無事に二人とも復活。

エヴァに取り込まれた当時のままだったから20代後半くらいにしか見えない。

ちなみに、母さんは僕の姿を見て鼻血を吹いて倒れた。

アスカのお母さんも鼻から血を出して、目を真っ赤にしてからアスカに詰め寄っていた。

「あんな可愛い義息子なら大歓迎だから結婚なさい!!」

「ま、ママ!何言ってるのよ!」

「ママの言う事が聞けないの!？」

と言った訳の分からない言い争いに発展していた。

ちなみにその時は綾波が…

「碇君の第一夫人は私だから!!」

と咆吼してその場は更に混乱したのは言うまでもない。

ちなみに父さんは今までしてきた僕の所業が全て母さんにばれてしまい、三年間の別居生活を宣告されて真っ白に燃え尽きていた。

そしてネルフの全権を母さんに剥奪されてヒラの一つ上の係長クラスに降格されて更に灰のようになっていた。

更に更に、ミサトさんのマンションの隣に引っ越してきて。

僕と綾波が母さんの所に。

アスカがいた所にアスカのお母さん、「キョウコ」さんも引っ越して来て…。

そして、ミサトさんは元の一人暮らし…と言っても隠し通路で直ぐに来る事は出来るけど…。

そんな生活になった。

ちなみに真ん中のミサトさんの所で食事を行う。

そして、時々母さんやキョウコさんがミサトさんに片づけの指導（肉体言語含む）を行って少しずつ改善していつてる。

まあ、そのうち加持さんと結婚するのだろう…。多分。

満更でもない雰囲気になってきてるし。

そんなこんなで四年の月日が流れた。

僕は18歳になったから結婚する事となった。

相手？

…相手は…綾波、アスカ、マナ、マユミ…そして何故かカヲル君。

母さんがいつの間にか民法を改正して一夫多妻と同性結婚が可能になるようにしていた。

そして、カヲル君はタキシード着ているのに何故か僕はウエディングドレスを着ていた。

何で？

僕は夫のハズなんだけど…？

けど、今更考えても仕方なかった。

何故なら、一番僕が…ウエディングドレスが…違和感なく似合ってしまったから。

これからは大変な生活が待ってるなあ…。

でも、良いかな。

父さんと母さんも今は仲良くなったみたいだし。

これで、良かったんだよ。

うん、これから頑張っていこう。

その後、カヲル君との子は出来なかった（当たり前だろ）けど、他の四人との子供は出来た。

ちなみに、全員母親似の娘だった事だけを報告しておこう。

完

## 最終話（後書き）

どうしてこうなったw

リア充か！？リア充なんですね！？

まあ、あくまでギャグなんで、細かい事は気にしないでください。

さて、使徒が来なくなった理由

以下、ゼーレとゲンドウ、冬月の会話シーン。

「コレが…お前の息子…だと？」

「こんな可愛い娘が女の子の訳が無い。碇、何のつもりだ」

「何のつもり…と言われましても。私はもう、貴方がたの手を貸す必要が無くなったのです」

「裏切るつもりか？」

「いえ、私はシンジの為に生きる事にしたのです」

「…なるほどな。確かにコレは…なるほど」

「ふむ。これだけ可愛いのであれば…」

「少し、我々も考えざるを得ないな」

「そうだな。我々としてもこの様な可愛い子を眺めるのも悪くない」

「むしろ、われわれの子として愛でて良いな」

「シンジは渡さん！」

「待ちたまえ。それなら条件がある」

「何でしょうか？」

「毎月、写真を撮って送リたまえ。そうすれば、使徒は来なくなるであろう」

「…（何を言ってるのだ、この老人達は…）」

「…分かりました。それなら、毎月50枚、シンジの写真を送りましょう」

「うむ。商談成立だな」

「うむ。我らとしても言う事は無い」

「では、毎月の報告を待っている」

数字の書かれた石盤は消え去った。

「…碇…」

「ふ…。写真くらい、どつと言つ事もあるまい」

「…そうか。（世の中がおかしくなったのか？俺がおかしいのか？）

」

こうして、シンジは人知れずに世界を救った英雄となったのであった。

いや、色々とおかしいからw

つか、変態の集まりかよwww

と言う訳で、このお話はこれでおしまいです。

皆様、クスッとでも笑って貰えたなら幸いです。

それでは、またお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2679q/>

---

新世紀エヴァンゲリオン ～人格交換？～

2011年5月22日02時30分発行